



シェイクハンド

第38号
H25.5

～静岡県訪問看護ステーション協議会便り～

なやみは半分、よろこび倍増

さあ みんなで手をつなごう!!

静岡県在宅医療推進センター事業における 訪問看護の重点課題について

静岡県訪問看護ステーション協議会副会長
静岡県医師会副会長 篠原 彰

静岡県では、平成23年度から25年度までの3年間、国庫補助金を活用して「(全県域版) 静岡県地域医療再生計画」を策定しましたが、その中では救急医療、周産期医療、在宅医療の3つを重点事業として実施することとしております。

静岡県医師会では、その一環として在宅医療体制整備事業を3ヵ年事業として静岡県より補助を受けて実施しています。県医師会館内に「静岡県在宅医療推進センター」を設置し、在宅医療推進協議会の開催、在宅医療機能・体制の現状についての調査と課題の把握、ICTを活用した在宅医療連携ネットワークシステムの構築、県民向け啓発活動等の6事業を実施しています。その中の一つに「在宅医療に関わる関係機関の連携体制の構築及び人材育成」があり、現在は医師・看護師等在宅療養に関わる専門職を対象とした研修会等の実施と、静岡県訪問看護ステーション協議会の活動支援の2事業を実施しています。

在宅医療を推進するためには、在宅医の育成・支援とともに、キーパーソンとなる訪問看護師を質量ともに充足させることが必要・不可欠であることは自明です。これまでも、静岡県訪問看護推進事業等のバックアップを得て訪問看護ステーション協議会の活動支援を行ってまいりましたが、今回、時限ではありますが新たな貴重な財源を確保できたことにより、平成23年度からは潜在看護師の掘り起こしや

訪問看護スタッフのスキルアップ研修の実施等について、静岡県在宅医療推進センター補助事業として、静岡県訪問看護ステーション協議会で実施しているところです。

表題にもある当該事業の最重点課題については、圧倒的に不足している訪問看護師の確保であることには論を俟たないと思います。急性期病院を中心として、全国各地での看護師不足は極めて深刻な状況が続いており、本県で十分な数の訪問看護師を確保するには大変な苦勞を伴うことは間違いありません。これまでも、様々な手法で訪問看護師の確保に努めてきましたが、残念ながら十分な成果は上がっておりませんでした。行政の協力も得ながら、訪問看護ステーション協議会を中心として新たな方策を検討してまいります。休職中の方も含め、看護に携わっている方々に訪問看護への関心を深めていただくことから一歩ずつ進めていくことが大切であると思っています。

私は、6年ほど前から焼津市にある中部看護専門学校の非常勤講師を務めています。カリキュラムの在宅看護論の中で訪問看護の部分を受け持っていますが、講義では、主として現在と将来にわたるわが国の医療や看護・介護の状況と、財源論を踏まえて発生する社会ニーズについて幅広く話しています。学生達も超高齢社会における在宅医療や訪問看護の必要性については十分に理解してくれており、講義



終了後に提出される学生のレポートを読むと、毎年10～20%くらいの学生が「将来は訪問看護をやってみたい」と書いてくれています。

現在、訪問看護師の数は看護師全体の約2%と聞いております。これから本格的に迎える超高齢社会では、高齢者医療は急性期医療と在宅医療に二分化されていくことは確実であると思います。急性期病院の再編も取りざたされており、在院日数もさらに短縮されることとなりますが、退院支援による急性期病院から在宅への円滑な移行も喫緊の課題となっております。また、我々地域医師会や開業医も、社会ニーズに対応することが医師としての使命であり、外来診療の延長線上にある在宅医療の提供は至極当然のこととして受け止める必要があります。

高度先進医療の進展への対応としてハイテク看護が必要であることに異論はありませんが、在宅で療養される患者さんにじっと寄り添う訪問看護師の役

割の重要性も見直して欲しいと思っています。また、訪問看護推進のためには訪問看護師の労働条件の改善を図ることは大きな課題ですが、患者さんや介護認定を受けた方、かかりつけ医やケアマネジャー達に、在宅医療や訪問看護への理解を深めていただく努力を続けていくことも必要であると考えています。

医療・介護の一層の連携は、今回の診療報酬・介護報酬の同時改定においても最重要事項とされておりましたが、高齢化がピークを迎える2025年までは同様の傾向が続くことは間違い無いと思います。超高齢社会はまさにこれからが本番です。常時医療や介護が必要な方々に十分なベッド数を確保することも大切ですが、既に現実のものとなっている多死社会においては、看取りを含めた在宅医療の推進は、今後の地域医師会活動の中でも最も力を入れなくてはならない事業であると強く認識しております。

市民公開講座 看取りを支えるターミナルケア

JA静岡厚生連 訪問看護ステーションなかいず

石井 由美

東部地区支部では、桜新町アーバンクリニック院長遠矢純一郎先生をお迎えして、がんの看取りをテーマに基調講演とシンポジウムを開催した。以下、その要旨をお伝えする。

団塊の世代が65歳を迎え、1人の若者が多くの老人を支える時代、いわゆる2025年問題が大きく取り上げられるようになった。そして、4割ががんで亡くなる現在、「治癒」という概念が変化しようとしている。

人を生命として生かすことだけが幸せなのではなく、これからは病気や障がいを持っていても質の良い生活ができるようにその人の生活環境の中で訪問診療が提供され、地域のサポート体制の中でサービス提供されることが必要である。国は、2020年までに在宅死亡率を25パーセントまで上げたいとしている。現状では12パーセント、医療者の中にも迷いがあり、「家では無理？」と次の施設に回していく傾向がある。できるだけ早く方針を話し合うこと、ど



んな段階でも家で無理とは限らず、地域の資源を掘り起こすこと、そのために病院での退院カンファレンスを積極的に行っていくことが必要である。最近では病院の意識が変わりつつあり、地域連携室に看護師が配置される病院が増えている。しかし、地域の体制が不備ではいくら在宅ケアを望んでも受け皿がなく、病院側が困っているのも現状である。訪問看護ステーションが存在をアピールし、共に在宅ケアをする地域医療機関を増やしていくことも大切である。

緩和ケアとは、何かをしてあげるのではなくそばにいて、という言葉にハッとさせられた。エネルギーが減少してきたときになるべく安楽に、穏やかに着陸するためのケアであり、徐々に弱まりゆく呼吸を感じながら過ごす一連の時間は最も大切な時



期、共感は苦しみを共にし沈黙と共にそばにすることで得られる。地域力を試されるのが在宅ケアである、と先生は話された。

後半は、すい臓がん、多臓器転移で痛みと不穏状態が強かった80歳の実父を家族で看取った事例でシンポジウムを行った。主介護者である妻が本人の退院直後に手首を骨折し、お勤めしていた娘夫婦、孫が協力して1か月半の在宅ターミナルケアを全うできた事例である。娘さんの言葉で印象的だったのは、「たくさんの業者を利用したが、訪問看護に言う他に伝えてくれるので同じことを話さなくてよかった」「大変なことはあったと思うが今は覚えていない。父を介護するまでは、一緒に暮らしていても家族それぞれだったが、父の看取りという過程の中で

家族関係に変化があった。ひとつになれた」そして、亡くなる3日前にもリビングに座らせた事、亡くなる前日に妻の頭をなでていた幸せな時間などエピソードを話してくださった。

この市民公開講座には153名の方が参加して下さった。シンポジウムの後には、かつて看取りを経験されたご家族からの意見、まさに病院から退院を勧められて迷っている、地域の資源を知りたいという方からの質問などあり、もっと広報して在宅ターミナルケアを病院医療スタッフ、市民にも広めたいと思った。また、訪問看護師としての自分を振り返る良い機会となった。

在宅医療に取り組んでくださる開業医がどんどん増えますように・・・。



湖西市訪問看護ステーション

尾崎 和子

1. テーマ：「訪問看護ステーションの防災対策」
2. 講師：浜松市役所 危機管理課 岡田充弘氏
湖西市役所 防災課長 高木久尚氏
3. 開催日時：平成25年1月12日(土)
13：30～16：00
4. 会場：アクトシティー研修交流センター
62会議室
5. 参加者：31名

いつ起きても不思議ではないといわれる東海地震が発生した場合、ステーションは何をすべきか。個々のステーションで防災マニュアルを作成していますが、それが現実に沿ったものかは疑問に感じているところです。そこで災害時の行政の動きを知り、ステーションの役割について考え、有効な防災マニュアルを作成するために今回の研修を開催しました。

講義では、浜松市と湖西市役所の防災担当者を講師とし、行政の立場からそれぞれの市の防災対策の現状や職員の動き等の話を聞くことができました。特に、浜松市、湖西市は海岸線に面しており、地震後5分で津波がくると想定される地区が多くあります。その時自分がその地域の利用者宅を訪問したらどうしたらいいのか…。まず自分の命は自

ら守る...自助が最も大切であると講義から学びました。これは職員が自助努力することで、1人でも多くの方が助けられる人から助ける人になること、自助が助け合いに繋がっていくということでした。このことは市民にも言えることで、3日間は自活できるように非常食や日用品の備蓄をする、住宅の耐震化や家具の固定、連絡手段の確保をすることで、自分が地震の被災者にならず犠牲者を1人でも少なくしていく準備が大切であるということでした。

訪問看護師は利用者宅の危険箇所をチェックしたり、家の耐震化や家具の固定、発電機の助成制度等、市の助成についての情報を積極的に収集し利用者に防災知識をアドバイスすることが必要だと思いました。利用者自身、家族にも地震が起きたらどうしたらよいかをイメージし日頃より防災について考えてもらうことも大切だと感じました。

講義後のグループワークでは、それぞれのステーションの現状を報告し問題を共有しました。「他の事業所の話が聞け疑問に思っていることを相談できた」「自助の大切さを知った」「地域の情報を日頃から得る努力が必要であり自主防災との連携が必要である」というのが研修後の感想として多く聞かれました。

今回の研修は市の動きを理解し、各自のステーションでの問題点が明確化され、より深く防災対策について考えるきっかけとなりました。



ステーション紹介

東部 訪問看護ステーション そよかぜ

稲村 啓子

私達「訪問看護ステーションそよかぜ」は、伊豆市の冷川という伊豆スカイライン沿いにある、社会福祉法人農協共済中伊豆リハビリテーションセンターが事業母体です。正式には「農協共済中伊豆リハビリテーションセンター 訪問看護ステーションそよかぜ」という少し長い名称で、地域の皆様には「そよかぜ」と親しまれています。

伊東市にある中伊豆リハビリテーションセンター伊東の丘という、クリニックや外来リハビリ、通所リハビリ、障害者福祉施設を一体で運営している施設内に事務所を構えています。また、熱海市にもサテライト事業所を併設し、伊豆半島東海岸沿いの地域で、医療・介護・福祉の総合提供を図っています。

スタッフは、看護師6名、理学療法士4名、作業療法士2名、言語聴覚士1名（兼務）居宅介護支援専門員4名の総勢17名で構成されています。平均年齢は36.3歳と比較的若く、スタッフは「訪問が好き」な

スタッフばかりで、自分達の看護ケアやリハビリ支援、ケアマネジメントへの思いを熱く語りながら利用者主体のサービスを目指し日々奮闘しています。

近年、超高齢化社会を目の当たりにし、急性期から在宅医療・介護まで切れ目ない包括的な支援が提唱されている現代、訪問看護が重要な橋渡し役になると考えています。地域医療・地域介護を活性化させて、切れ目なく健康で安心して暮らせる町づくりを支えていく責務を感じています。

私達ステーションのある熱海・伊東圏域も高齢化社会は大きな問題となっています。実際に訪問していると、老老介護世帯や独居老人世帯が多くありま

す。また難病患者様も多く、在宅ニーズが高い地域といえます。その中で地域の皆様に信頼され、愛されるステーションを目指して、日々研鑽していききたいと思います。

次は「訪問看護ステーション紡ぎ」さんです。



中部 訪問看護ステーション アポロン

碓井 伸子

こんにちは、訪問看護ステーションアポロンです。平成12年3月に健社会アポロン中溝内に併設され、今年で13年目の春を迎えました。現在、常勤看護師1名、非常勤看護師3名、常勤理学療法士2名、非常勤理学療法士1名で訪問看護、リハビリの提供をしています。看護は24時間対応を行うには厳しい現状ではありますが、日々のケアを充実させることやリハビリをはじめ他職種との連携を密に行い情報交換することで何とか対応しています。

60歳以上の人口が全人口の1/3を占めるように

なり、島田市に於いても高齢化率が25%を超える昨今、以前は「カテーテル管理」「終末期」などの医療的処置が主な対象と考えられてきましたが、高齢化による様々な症状「生活不活発症」に対して看護・リハビリがタッグを組み、在宅療養をされている方々を支えていけたらという思いで頑張っています。その為には、看護・リハビリそれぞれの専門性を生かしたケアの方向性の共有と協調を十分行い、進めていく必要があると痛感しています。同時に、生きる為のアセスメント、生活する為のアセスメントを



し、何よりも利用者本人に対して、生きる意欲（＝生きがい）「生活の活発化」を提示する事を当ステーションの売りにしていきたいと考えています。

これからも家族の相談相手として気軽に頼って頂けるよう、また地域の皆様に風通しの良い訪問看護ステーションとなるようスタッフ一同、力を合わせて努力していきます。今後とも更なる進化を目指す「新生！訪問看護ステーションアポロン」を宜しくお願い致します。

次は「訪問看護ステーション丸子の里」さんです。



西部 訪問看護ステーション いわた

長瀬 由美

こんにちは。「静岡県看護協会 訪問看護ステーションいわた」です。

平成11年4月に開設し、遠州灘の海の近くから豊岡の山の方面まで磐田市全域を訪問しています。とにかく安心して自宅で過ごせるように看護をしています。

平成25年3月に磐田駅から南に約1.5kmのところに磐田市急患センターが開設され、ここに地域の医療・介護・子育ての3つの機能を備えた複合施設として訪問看護ステーションも位置づけられ、引越したところです。これから建物内の包括支援センターや磐田医師会・磐田薬剤師会などとさらに連携をはかり、地域の安心・安全に力を入れていきたいと考えています。

スタッフは常勤5名、非常勤8名、事務1名です。看護師としての経験はもちろんのこと、スタッフも家庭では嫁であり、妻であり、母であることから日々の様々な人生経験を訪

問看護にいかし、在宅で病気や障害がありながら生活しているところに寄り添い、心と身体のケアをしています。我が訪問看護ステーションは明るくほがらかなスタッフがそろっており、利用者さん・家族・他事業所の方からも話しやすいし相談しやすいと好評価をいただいています。もっともっと地域の顔となれるようにがんばります。

対象は0歳児から高齢者まで幅広く、医療保険3割、介護保険7割です。最近はがん末期の短期利用が増え、在宅看取りも年々増加しています。自宅で看取った御家族からは、「自宅で見てほんとによかった」とみなさんいい顔でお話しされます。ますます療養も看取りも在宅へシフトされるなか、訪問看護師として医療面と生活面を支援し、その人らしい暮らしに寄り添っていききたいと考えています。

次は「訪問看護ステーション掛川」さんです。

次は「訪問看護ステーション掛川」さんです。





愛と希望の済生会 ～地域連携～

静岡済生会総合病院 地域医療センター 入退院管理室長 看護師長 吉田聖乃

すべてのいのちの虹になりたい 100年以上にわたる活動を踏まえ今、済生会は次の三つの目標を掲げています。済・・・生活困窮者を救う 生・・・医療で地域の生を守る 会・・・会を挙げ、医療福祉の切れ目ないサービス 病、老い、障害、境遇・・・悩むすべてのいのちの虹になりたい。済生会はそう願って、いのちに寄り添い続けます。平成23年5月30日で社会福祉法人恩賜財団済生会は創立100周年を迎えました。創立の理念「施薬救療」は今も継続されています。

「〇〇さんいる？話きいてもらえる？」と患者さん。「急ですが今から、医師からのICがあるので入ってもらえますか」と病棟看護師。「介護保険のこと、説明してもらえますか」と外来看護師。「医療費のこと相談にのってもらっていいですか」と事務。「緩和ケア科があると聞きましたが対応してもらえますか」と患者家族。「今週急きょ退院をするので在宅対応できるようにお願いしたい」と医師。「大腿骨頸部骨折パスで本日手術3時からなのでお願いします」と看護師。「〇〇さんが入院したと聞きました」が相談室の担当の方お願いします」と市役所担当者。地域医療センターの医療相談室・地域連携室・入退院管理室それぞれの電話が鳴ります。電話だけでなく直接来ていただくこともあります。このように患者さんやその家族・診療所の医師やスタッフなど地域の窓口としてまた、院内の医師・外来看護師・病棟看護師・事務等の依頼に日々対応しています。退院支援のシステムがありアセスメントシートでスクリーニングをしますが、それだけでなく、生活にわたる様々なことに医療ソーシャルワーカー6名・臨床心理士3名・事務7名・看護師5名がそれぞれの室で役割を果たしています。(平成25年3月現在)

静岡済生会総合病院は、静岡市駿河区に位置して

います。社会福祉法人立として、単に医療機関として存在するのではなく、生活困難者や心身の障害者等社会的弱者といわれる人々に対し、常に医療の手をさしのべ、福祉・医療を積極的にすすめてきました。また、疾病の予防・検診・衛生教育・治療・社会復帰等を一貫した総合医療ととらえ、これを推し進めてきました。当院は福祉・医療に取り組み六十年以上が経過しています。近年、在宅への診療報酬改定がなされ多くの病院で退院支援の取り組みがなされています。

昨年度、私たちは目標として“病院での医療を受けた患者・家族が、退院後切れ目なく必要な医療の提供と、ライフステージに合った療養生活を安心して受けられる退院システムを構築する”をあげました。退院支援を行っていますが、退院がゴールではなく、退院後もその人らしい人生を全うしてもらうことをめざしています。ベッドサイドの患者の近くに常在して患者・家族に寄り添い生活を整えていくことが本当に重要です。そしてケアの質をあげていくことがさらに必要になっています。そのために、ワーキンググループを立ち上げ退院調整・支援をする看護師の育成をしています。活動は4年目になり、師長・主任の教育から始め、現在は各部署のリーダー格がメンバーとなっています。

週1回退院調整カンファレンスを各病棟で実施し定着しています。病棟看護師が医療ソーシャルワーカーと退院調整看護師とともに行っています。入院早期から退院支援に取り組むシステムを構築しています。また、ワーキンググループで院内指導の統一を図るために退院指導用パンフレットの作成を行っています。点滴・吸引・経管栄養・尿道カテーテルなど病院と地域との連携が円滑に進み、継続した医療の提供ができるよう取り組んでいます。製本化し





活用していく予定です。毎年いろいろな施設見学も行い、療養の場を実際にみることで急性期病院の役割を改めて学ぶ機会を得るようにしています。在宅へ退院していく患者の情報提供用紙として入退院連携シートがあります。これは静岡市の訪問看護ステーションで統一した用紙です。更にふじのくにねっとで地域の診療所・病院と連携しています。これからその情報システムを活用していこうと考えています。まだまだ課題が多く、訪問看護ステーションからの依頼にこたえられない現状もありますが、少しでも対応できるよう努力していきます。

私は病棟勤務から地域医療センターに異動して1年です。至らない事が多くご迷惑をおかけしますが当院地域医療センターは様々な状況に対応できるスタッフがいます。ちょっとしたことでもお気軽に連絡頂けたら幸いです。宇都宮宏子氏が述べているよ



うに「老いても、がんになっても家にいたいと思ったら、帰れる地域を作っていく」ために私たちも訪問看護ステーションの方々とともに取り組んでいきたいと考えています。これからもよろしくお願いいたします。

秋山正子氏講演会 「最期まで自宅で過ごす～自分らしい暮らしをあきらめない」報告

JA静岡厚生連 訪問看護ステーション茶町 小長谷 葉子

2025年問題や超少子高齢化多死社会を迎えている今、近い将来病院で最期を迎える事ができなくなる状況が危惧されています。「最期は病院で」という考え方が一般的になっていますが、元気な時は自らの最期や最期の場所について考える事は難しく、在宅看取りの経験が無ければ在宅で最期を迎える事ができないと思っている方がほとんどではないでしょうか。

講演の中で秋山先生が、住み慣れた地域や家で最期を迎える為多職種との密な連携やご家族の揺れる気持ちに寄り添いながらの丁寧な支援を実践されている事や、「その人の輝きを引き出す、今生きている喜びを味わう、いのちに寄り添うケア」の大切さを改めて理解できました。ご本人やご家族へ暖かい眼差しや情熱を持ちながらケアを実践する事で、関わる皆が在宅で最期を迎える喜びを実感でき、更には国が抱える問題の解決に繋がっていく事を感じました。

在宅で最期を迎える事は、支えるご家族にとって心身共に大きなご苦労があると思います。沢山の方に在宅看取りを身近に感じて頂く為には、在宅で暮らすご本人やご家族を支える医師や看護師が中心となり、多職種がいのちに寄り添うケアを届ける事が重要であり、今後の課題であると深く感じました。





平成25年度 総会・研修会開催について

通常総会・研修会を下記の日程にて開催致します。全体研修会の講師に医政局の在宅看護専門官をお招きしています。在宅医療の現状とこれから予測されることを正しく理解し、介護職との連携も含めた訪問看護師の役割について考えましょう。皆様のご出席をよろしくお願い致します。

〈総会〉

開催日 平成25年6月29日（土）
 会場 静岡県総合研修所もくせい会館 富士ホール
 静岡県葵区鷹匠3-6-1（TEL 054-245-1595）
 時間 総会： 14：50 ～ 15：50
 研修会： 16：00 ～ 17：30

〈研修会〉

テーマ 「在宅医療の推進について～2025年を見据えて～」
 講師：厚生労働省医政局指導課在宅推進室 在宅看護専門官 後藤 友美

※ 総会・研修会終了後に下記の通り懇親会を開催しますので、ぜひご参加下さい。
 詳細は後日お知らせします。

時間 19：00～
 場所 松坂屋静岡店 本館8階「梅の花」

西部支部研修のお知らせ

テーマ 「高齢者のための栄養について」
 日時 平成25年7月27日（土） 14：00～16：30
 会場 アクトシティ研修交流センター 62研修交流室

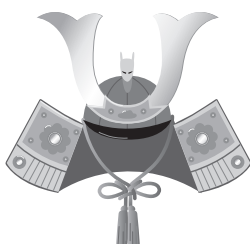
【シェイクハンド第37号掲載記事のお詫びと訂正】

シェイクハンド第37号のP 6、1行目タイトル欄に誤りがありました。
 当該機関、執筆者様ならびに関係各位にご迷惑をお掛けしましたこととお詫びするとともに、下記の通り訂正させていただきます。

（誤）県西部浜松医療センター ⇒ （正）浜松医療センター



今号は「在宅医療の推進」が大きなテーマでしたね。
 協議会の事業も連携・推進が
 キーワードになっています。
 研修への参加も含め、今年度
 も皆さんで訪問看護を盛り上
 げていきましょう。



シェイクハンドNo.38

2013年5月発行

発行所 静岡県訪問看護ステーション協議会
 静岡市葵区川辺町二丁目4番地の13
 常葉サテライトビル3階
 Tel 054-275-3339
 Fax 054-275-3338
 e-mail sizuokahoumonst@cy.tnc.ne.jp
 発行人 上野 桂子
 編集者 石井 由美（訪問看護ステーションなかいず）東部
 竹澤まゆ美（訪問看護ステーション 萩）中部
 赤堀奈緒子（訪問看護ステーション掛川）西部